

吸いかけの煙草を揉み消すと、俊彦は、藁半紙に肉太のサインペンを走らせ始めた。

文学部九十二、教育学部三十五、法学部七十三というふうには、乱暴に書きつけていく。俊彦の机の後ろに積み上げた「学報」の四千字を、午後の使送便で、学部や、学内の研究所に送り出さねばならない。

俊彦は、この仕事を四年半もやっているの、どの学部にも何部などという数字の端まで詰っていた。作業にとりかかるまでは、コーヒーを飲んだり、煙草を吸ったりしているが、いったんとりかかったら速かった。文学部から、最後の短大部まで書き終えるのに、三分とかからない。それが終わると、積み上げた山を一つずつ崩し、必要な部数だけビニール紐でくくっていく。

俊彦はこの小一時間ほどの時間が好きだった。というのは、この時間が誰からもなんの文句のいわれようもない、自由な時間であるからだった。

最初、この仕事を与えられたとき、俊彦は自分なりに、編集やレイアウトに意匠を凝らそうと努めた。ただでさえ硬い大学の規則や、論文名などが並ぶ報知物が主であったのを、一年がかりで委員会を説き伏せ、小さなコラムではあるが、「キャンパス百景」や、「タウン情報」をとり入れた。学生の表情をとらえた写真もふんだんに使おうと、カメラを抱えて教室や、サークル室や、学生街や、隣町の農場にまで足をのばした。

しかし、俊彦が足で探した、ガラス工の毛細管づくりの技術や、見本林を預かって四十年になるという技能職員たちのニュースは、名誉教授の叙勲や、核融合炉の開発のニュースなどに比べ、小さく地味であった。

上級職の資格をもっている、俊彦より五歳近く齢の若い佐川という係長は、俊彦がそれらの原稿を提出する度に、

「君は、紛争の生き残りだからねえ」

と、皮肉っぽく眼鏡の奥の目を光らせた。部下である君が、こういう無分別なことではぼくが困る、とでもいいいたげに、いつもその原稿を、無造作に書類箱の中に放り込んだ。

「これでは、お上からのお達しそのものになってしまいうじやありませんか。大学の良心というものはないのですか」

と、詰め寄る俊彦に、

「まさに大学の良心じゃないか。第一、委員会で編集方針が決められている。その柱にそって書くしか、君、方法はないだろう。学報には、学報の立場というものがある。タウン誌じゃないんだよ」
そんなときの佐川は、殊更やわらかい口調で、ゆっくりしゃべる。類のあたりに微笑さえ浮かべ、ときには、はずした眼鏡に息を吹きかけながら、丹念に布で磨いたりする。だから、課員たちも、俊彦と佐川のやりとりが、意見の齟齬などとは気付かない場合の方が多かった。

自分は、拾われた身ではないか。

俊彦は、佐川の胸ぐらにつかみかかりたい衝動に駆られると、決まって経済学部の元事務長の顔を思い起こす。井熊という名前に似合わない痩せぎすの小柄な事務長は、俊彦たちが、文系本館のバリエード封鎖を繰り返していた頃からのなじみで、そんな格好を見たらお前らの親がどんなに嘆くかとか、勉強もせんで国の建物や器物をぶっこわしてばかりいてなにが学生か、とばかりいう者が多いなかにあって、若いうちにはやらねばならんこともあるさ、と一人バリエードの中に入ってきては、握り飯をさし入れてくれたりした。

その後、俊彦が経済学部を中退して、就職のあてもないままぶらぶらしているのを呼び出し、自分の下に採ってくれたのだった。

拾われた、と俊彦が思うのは、ただ井熊が俊彦を事務員として雇ってくれたからだけではない。井熊は、草舎と号する俳人でもあった。すさんでいた俊彦の気持が、井熊のひょうひょうとした姿にひかれていくのに、いくらも時間はかからなかった。どうだ君も俳句をやらないか、などとは一言もいわないのに、いつの間にか井熊の主宰する地方誌に、俊彦も雑詠句を投ずるようになっていた。

その井熊に推されて、この総務課にきた手前もあった。別に、短気を起こすな、と諭されてきたわけでもなかったし、仮に佐川を殴って辞表を叩きつけようが、自分の顔に泥を塗られた、などと騒ぐ人ではないことはわかってる。それだからこそ、俊彦には井熊の存在が、よけいに重みをもって感じられるのだった。

この一年ばかりは、俊彦も佐川の方針にたいして逆らわず、黙々と机の上のものを片付けていく仕事ぶりに変わっている。決められたルートで、一か月前に原稿が寄せられてくると、若干の字句の修正だけをして印刷にまわす。校正の段階では、一字一句原稿のおおりに朱筆を入れ、やがて冊子になるのを待つ、という具合だった。

紛争時代には思いもよらなかつた、学長選挙の選挙人から教員以外の者を除外するという規則や、学生の時間外活動の内容や時間を制限するというような通達が、俊彦の朱筆の下を易々と通り過ぎて

いった。

紛争とは、一体なんだったのだろうか。

俊彦は、ときおり校正の手を休め、ぼんやり窓の外を眺める。バリエードが高く積まれ、気負った文句をつらねたタテ看板や、自治会や職組の旗が乱立していた記念館のあたりには、いまは、こざつぱりした身なりの学生たちが、一人、二人と出入りするばかりで、あの沸き立つといった喧騒もなく、授業料値上げ反対のプラカード一つない。

海からの風に、大銀杏の葉が舞う正門付近では、自動車の入構規制も始められていて、学生たちも、素直に守衛の指示に従い、頭を掻きながら許可証を呈示していく。

俊彦は、ざわついている課の空気から一人離れ、四千部の山を次々と崩していく。なにを考えるでもなく、指先がビニールひもを適当な長さに切り、冊子を結びあげる。結びあげた冊子は、床に広げた新聞紙の上に、この大学の五つのキャンパス別に重ねて置く。

「松井君、電話だよ」

佐川の鋭い声が、俊彦の耳に届いた。佐川にしては珍しく甲高い声だと思っただけ返ると、「何回呼んだら聞こえるんだ」と、佐川の顔が紅潮している。あたりを見まわすと、課員たちが、仕事の手を休めて二人を見詰めている。

佐川は、自分の机の上に投げ出した受話器を顎でしゃくると、椅子と一緒に横を向いてしまった。その仕種が、日頃の佐川の慇懃さに似ず唐突であったためか、女子課員たちの低い笑いを誘った。

「おい、いまのは誰だ」

俊彦が受話器をとると、あたりに聞こえそうな大きな声が叫んだ。明石だった。元理学部生で、卒業した後、しばらく大手の繊維会社に勤めていたが、五年ほど前に辞め、いまはこの街の繁華街に小さな喫茶店を出している。

「えらく感じ悪いな」

「すまんが、少し」

俊彦は声を落とす。明石の声なら、普通にしゃべっても、受話器の外まで聞こえてしまう。佐川の耳にも届いたのではないかと、俊彦は佐川の横顔を窺った。佐川は、無然とした顔で、たて続けに煙草の煙を天井に向けて吐いている。

「なに、えらい横柄な口をきくやつだといったんだ」

明石の声は、よけいに大きくなった。店での客の扱いには如才ないのであるが、俊彦への電話などでは、つい乱暴な口調になる。役人てやつは、一番俺の肌にあわねえ、というのが口癖であるから、大学に電話を入れたということだけで、明石自身の嫌悪も混じって

いるのであろう。

「わかった」

俊彦は、クルリと佐川に背を向けた。

「それより松井、今度の土曜空いてるか」

「とうとう、二十五日だな」

「二十五日だ。なんの日だかわかるか」

「九月二十五日」

「とっさに思い出せないところをみると、お前、だいぶくたびれちまったな」

「九月、二十五日」

「ホラ、二十年前の」

「岡藤の」

俊彦は、あわてて周囲を見わたした。タイピストの子が、丸い目を見開き、俊彦を見上げている。

「そうだよ、二十年だ。もう二十年だよ。あつという間だと思わな
いか」

「もう二十年。ついこの前のことだった」

「いいや、そうとばかりもいえん。ずい分昔のことだったみたいなきもするし、あ、ちよっと待ってくれ」

受話器の奥にドアの開く音がして、二、三人の話し声が聞こえてきた。「むげんだい」に客が入ってきたらしい。明石は、硬いカウ
ンターの上にじかに受話器を置いたまま立っていったとみえ、フロ
アを歩く足音や、椅子を引く金属性の音が交錯し、低くうなりなが
ら俊彦の耳にとび込んでくる。それに、いままで明石の声しかない
と思っていた店の内には、数年前に引退した歌手のYの突き放した
声の特徴のアップテンポの曲が、かなりのボリュームで流れている。

俊彦は、傍の椅子にゆっくり腰をおろした。岡藤がTホテルの一
室で縊死してから、もう二十年という時間が流れ去ってしまったこ
とになる。俊彦にとって、二十年という年月はあの日の衝撃を忘れ
させるに十分な時間であるとも思えるし、いま改めて目の前に突き
つけられると、容易にあの瞬間に引き返し得る、他愛もない時間だ
とも思われる。

岡藤の死体を発見したのは、工学部の河田だった。河田は、俊彦
たちの所属する「社革」の副委員長で、その日、M公害裁判闘争の
支援に朝の六時から現地向けて出発することになっていたため、
委員長の岡藤を誘おうとして、彼の死体を発見したのだった。

岡藤は、Tホテル五階の一番北側の部屋の浴室で、シャワーの留
め金に浴衣のひもを結びつけ、うずくまったまま死んでいた。

明るい水色のタイルには、両手首の血管から流れ出たおびただし
い血液が、波紋を描いて、薄く乾いて広がっていた。半ばまで湯を

はった浴槽にも血液は沈澱していて、美しいあずき色の絵の具を、誰かが不用意に落とし込んだといった悪意のない、しみじみとした色で透き通っていたのだった。

実際、小さく開いた窓から斬り込んでくる秋の朝の冷たい光の中で、それが、なにか事件の現場などというものとはほど遠い、落ちていた空気を通わせているのを、俊彦ははるかな光景を見る思いで眺めたのを覚えている。

「すまん、すまん。いつもは、この時間はガラガラなんで安心してたんだ。なに、和ちゃんにまかせてきたから大丈夫。それで、土曜はどうだ」

「多分」

「そうこなくっちゃ。そこでだ、時間は三時、場所はTホテル」

「Tホテル」

「と、いきたいが、こいつはあんまりいい趣味じゃないな。まあ、せっかく俺の店も細々と続いていることだし、どうだ、むげんだいということじゃ」

明石の声が、一段と高くなった。松井さん、OKなの、という和子の声が、水音の向こうに聞こえる。

「岡藤真一追悼ということだ、どうだ、二十年に一ぺんぐらいは鼻面を並べたっていいだろう。これぐらいやらんと、罰が当たるかもしれないぞ。上村も、河田も、それに洋子もくる」

一息にまくしたて、明石は一方的に電話を切った。

俊彦は、ゆっくり受話器を置いた。あまり話さなかった割に、ずいぶん長い電話だったと、急に静寂のなかに引き戻されてしまった間の悪さを覚えながら、佐川の方を振り返った。

佐川の青白く尖った顔が、俊彦を見据えている、と思ったが、佐川の椅子は左横を向いたままで、そこに姿はなかった。奥の課長席のあたりを見やると、補佐や佐川たち係長らが課長をとり巻いている。また、お決まりの「打合せ会」が始まっているらしい。

こんなときの後には、いつも課長からの指示をまわりくどく伝える佐川のことばを、辛抱強く聞かねばならない。

俊彦は、椅子を立った。使送の時間までいくらもない。まだ、半分に近い学報の山が残っている。

途中で作業を中断したため、指がなかなか元のリズムに戻れない。五冊ずつを数えるのに、何度も同じ個所で間違ってしまう。

それに、少しだけ唇を突き出し、うずくまっていた岡藤の顔がありありと蘇ってきて、ふっと気持が浮いてしまう。あれほど鮮明に、体の芯にまでやきつけていた岡藤のことであるのに、明石のとっさ

の問いに応えられなかった、という苦い思いもある。
そう考えているうち、せつかく七十、八十とまで数えた冊子が、
収拾のつかないものになり、また最初からやり直さねばならなくな
る。

「松井君」

いつの間に戻ってきたのか佐川が呼んだ。佐川は上機嫌の態で、
眼鏡の縁をブラインド越しの日差しに光らせている。

「今度の学報の写真、学長がお誉めだとのことだ。例の、女性領事
の、ほら、なかなかアングルがいいといったやつだ。僕も、こい
つはいけると思ってたよ」

バカバカしい、と俊彦は思った。その写真というのは、米国の若
い女性領事が学長を表敬訪問した際のもので、普段は学長と訪問者
がソファアに向かい合っているところを撮るのであるが、このとき
は、旧米軍基地跡から掘り出された弥生式土器を覗き込んでいると
きの領事の横顔を、ちよつと驚いたふうな表情のまま、斜め下のア
ングルでとらえたもので、佐川が最初、こんなふざけた撮り方をし
て、と机に放った代物であった。

が、どうしたわけか、その他の写真が絞りの具合がいまひとつだ
ったり、ピントが甘かったりしたため、しかたなくこれを選んだの
だった。

「君のことを大いにピールしておいてやったよ。どうだ、米領
事と、かつての米軍基地跡から出土した土器との対照。これはなか
なかニュースバリューがある。ここにはなにか、歴史的な無言の対
話が流れているといった、君、そんな力が迫ってくるじゃないか」
佐川は、そのページを指し示しながら、俊彦の肩にすり寄ってき
た。柑橘系の強い整髪料の匂いが鼻をつく。

「それなら、どうしてこんな隅の方に載せたりしたんですか」

俊彦は、そう、喉元まで出かかったことばを、かろうじて飲み込
んだ。

バスを降りると、俊彦は、バス通りから通り一つ入った、むげん
だいに急いだ。

このあたりは、つい最近まで県庁があり、東側の夜の歓楽街につ
ながる東西の幹線道路をなしていたのだが、県庁が移転してからと
いうもの、すっかり人通りもまばらになっている。一日に千を越え
る人が出入りしたという古びた中世風の建物は、いまは廃墟さなが
らに放置されてある。新聞などの報道では、この建物も近々とり壊
されるとのことで、史跡としての保存を訴える歴史学者たちの垂涎
の的になっているのであるが、お上のものは大切にしないというこ
の街の革新的な気風のなかでは、生き残ることは不可能に近いので

はないかといわれている。

折も折、新しく移転したばかりの知事公舎が華美に過ぎるといって、厳しい県民の追求の声があがっており、この老残の遺物の存在は、権勢の座を譲り渡して一年にも満たないというのに、すでに系譜にもとどめられぬほどに忘れ去られてしまった感があった。

思えば、このあたりは、安保や米軍基地撤去といった一連の闘争で、学生や労働者が全勢力を結集して渦巻いたところである。俊彦が、ヘルメットを叩き割られて前頭部に裂傷を負い、岡藤や明石がジュラルミンの盾に向かって旗竿で突きかかり、河田が催涙弾の破片をあび、左腕に大火傷を負った。

あの権力の象徴、あの憎悪のシンボル、あの喧騒、あの重苦しい恐怖。いまバスを降りたって、朽ちかけた塀に沿って歩いていく俊彦の目には、かつてのそれらの光景が、陽炎となり、透明な点滅を繰り返し始めるのだった。

県庁の横を抜け、車道を渡ると、十数階建ての近代ビルが建ち並んでいる。そのSビルの地下にむげんだいはあって、かなり急勾配の階段を下りていかねばならない。

Sビルの表玄関側の賑わいとは違って変わって、むげんだいの入口は、車庫や荷物搬出入用の入口が並んだ路地に面しているので、ちよつと人目につきにくい。不案内な者には、そこに入口があるので、さえ気付かないのではないかと思われるのだが、俊彦がぶらりと寄るときには、いつも余席がないほどに混んでいる。そんなとき、これが死角の利というものさ、とカウンターの中の明石は、得意そうにパイプをくゆらした。

「本日休業」という小さな紙片の貼られた入口に立つと、俊彦は腕時計を覗き込んだ。三時まで、あと二十分ばかりある。

一番先に入り、明石と間近に顔を合わせるの、先日の電話のこともあり、ちよつと気重になる。しかし、河田や上村の後から入っていくのもためらわれる。

今日は、岡藤のことできたんじゃないか。

そう思い直すと、俊彦は、もつと早くきてもよかったという気がしてきた。十二時半に勤務を終え、一時間半ばかりを将棋でつぶしてきた。なぜか、早く出かけることがためらわれて、たいして好きでもない将棋に付き合ったのだった。

俊彦は、秋の日差しが半ばほどまで差し込んでいる長い階段を下りた。二畳ほどの踊り場を抜け、ガラスのドアを押して入ると、弾けた笑いが耳にとび込んできた。

「赤電話のところでバツタリ出喰わして」

上村だった。

「きたな、三人目だ」

カウンターの奥から、明石がいった。

「お久しぶり、松井さん」

洋子もいる。

「何年ぶりだ。五年か、六年か。いやいや、もっとだな」

上村と洋子が、一緒に振り返った。

「驚いたよ、二人とも、ちっともわかりやしない」

俊彦は、前頭部が薄く上がりかけ、すっかり商人らしいもの腰になった上村の赤ら顔と、黒のツーピースを体の線にきっちり合わせて着こなしている洋子の顔とを、交互に見比べた。

「上村は課長、河田は助教授、洋子は新進のシナリオライターだ。

人間、予測のつかんもんだな。それにしても、あい変わらずなのは、松井と俺だけだよな」

戸棚の隙間から半分顔を突き出し、明石がいった。

「課長なんてからかうんじゃないよ。ちっぽけな商事会社の、課員がたつた九人の課長だ。俺より二年早くなつたやつもいる。それも高卒でだ。俺なんか、いまだにラインの外をうろついている」

額の汗をハンカチで拭い、まんざらでもなさそうに上村は笑った。「いやいや、昔の君からみればたいしたもんだ。社革と器楽部をいったりきたりして、下手なトランプトばかり吹いていたやつがだよ、いまは部下を預かる身だからな」

明石が、カウンター越しにコーヒーカーップをさし出した。

「全く、あの頃の君といたら、理論なんか持ち合わせがあるのかと思つたよ。それでいて、いざとなると断固粉碎だからな。パンチをあびてフラフラのやつが、コーナーの隅でダウン寸前に放つ強烈なアッパーカット、という役割だつたよな」

「あんまり情けないことを思い出させるな。これでも、ジャブもストレートも自信があつたんだ。それが、君たちの方がストリートではやるもんだから、とうとう打つチャンスがなかったというだけさ。ハア、そいつがいまも尾をひいていやがって、上や仲間の後始末ばかりやらされてる」

「俺はこれでも精一杯誉めてるつもりだ。見てみる、このくそ暑いのに、キチンと背広を着こんでさ。それだけでも感嘆に値するよ。俺にはどうも、ネクタイつてやつはてんで性に合わねえ」

二センチほどに伸ばした顎髭を片手でひねりながら、明石は、一方の手でアイスピックを逆さまにつまみ、揺らしている。

「あの頃が一番よかつたと思う」

洋子が、卓上のライターを擦る。

「もう一度あの頃に帰りたいとは思わないけど、いまのさっぱりし

た生活が、たまらないくらい空しく思えるときがあるの。忙しさにかまけ、なんでもわかっているという顔をして生きてるけど、実のところなんにもわかっちゃいない。あの頃みたいに、むやみやたらに断定したり、叫んだりしないだけで、決して自分が大人になったなんて思やしないわ」

青白い煙をすうつと吐き、洋子は瞬きもせずに行った。

「ところで、断っておくけど、今日のそもそも企画は洋子なんだ。あの頃のことを、ひとつシナリオの素材にしてみようというんできたんだ、な、洋子」

明石が、カウンターをくぐり抜けて出てきた。

「一週間ばかりいて取材してみようと思うの。でも、自信ないわ。当事者だったくせに、なんにも見ていない。当事者だったからこそ、逆に見えないのかもしれないし。それに、私みたいな者が、安易にとりあげてよいことかどうか、まだ決断できずにいるのよ」

「そいつはいい。僕も、この四、五年、必ずいつかなにかのかたちで記録に残しておきたいと考えてた。なまなましかった、あの記憶がだんだん薄れてきて、ときどきは、本当に現実のことだったのかと不思議に思えるときがある。特に、いまのキャンパスにいると、とんでもない夢でもみているのではないかと。これが、あの二十年前と同じキャンパスなのだろうか、ね。敷石をはがして闘った記念館前などに立っていると、わけのわからないめまいにおそわれる」

俊彦の角砂糖をとかすスプーンが、カップで鳴る。

「こいつは、時間という化物のてひどいしっぺ返しだろう。そして、その他ならぬ当事者が、俺たち自身であるというわけだ。で、洋子、松井に頼みがあるといってたな」

明石は、俊彦と洋子の間の椅子に腰を下ろした。厨房の火に照らされていたせいから、顎から鼻の頭にかけて、大粒の汗の玉を浮かべている。

「松井さん、大学の資料を扱っているのよね。それを、ほんの少し、どうしても思い出せない部分があるの。悪いけど、その一部分だけでいいから、なんとか提供してもらえないかしら」

「そんなこと、簡単さ」

俊彦の頭に、ふっと佐川の顔が浮かんだ。佐川にまともに相談すれば、

「なにいつてるんだ、君。学外者に提供するなんて、もつてのほかだ。ジャーナリズムだよ、相手は。どう使われるかわかったもんじやない。万が一、不都合なことになったら、誰が責任とるんだ。組織の中にいる人間が、そんなイロハさえわからずに、どうする」

というふうには、一蹴されるに決まっている。しかし、学報にしる、学内ニュースにしる、広報として公表してきたものばかりだから、

いまさら目くじらをたてることでもあるまい。第一、大学図書館に
いけば、誰でも自由に調べることのできるものだ。

その俊彦の逡巡を見てとったのか、
「そう、自分の足を使えば、資料は得られるわね。でも、それだけ
じゃなくって、もし嫌でなかったら、松井さん自身にもつき合っ
てもらえれば、と思ってるの」

洋子は、まだ長いままの煙草をガラスの灰皿に揉み消すと、真直
ぐに俊彦を見詰めた。

透き通りそうな目である。鼻や唇は顔の半分より下にまどまど
いて、その一つ一つは決して際立って美しいというほどではないの
だが、全体の美しさは、人を射るものがある。東京の水が合うのか、
学生時代より、むしろ華やいで見える。

「岡藤のやつは、幸せなやつだ。こんな美人に、二十年経ったいま
でも思われてやがる。あのとき俺も、いっそ死んじまうんだったよ」
「そいつは、ちよつとおかど違いじゃないか、明石。岡藤だからこ
その、ご執心だよ。しかし、結局、いいときに死んじまったんだよ、
岡藤のやつ。こんな醜態さらさなくて済むんだし」

上村は、薄くなった額をつるりと撫で上げた。

「岡藤のやつは、『憂いに満ちた、長身瘦躯の、鬨える弱冠二十二
歳の青年』のそのままで、洋子のうちに生きているといわけか。
これじゃ、絶対敵やしないな。で、お名指しの松井はどうだ。都合
はつくのか」

椅子に深々と腰を沈め、明石はパイプをくゆらしている。パイプ
からは、甘い匂いの煙がたちのぼり、天井のあたりで緑色の薄い層
となつて、揺らいでいる。

俊彦は、洋子のいった、俊彦自身につき合つて欲しいということ
ばの意味を解しかねていたが、「大丈夫だよ、多分」と、答えた。
「ずい分頼りない返事だな。少しは嬉しそうな面ぐらいするもんだ。
でも、頼む。力を貸してやってくれ。後のことは俺が面倒みるから。
なに、洋子には、一方的に片思いの気持を貫いてきた俺だ。もちろ
ん、いまでも変わらさずさ。ところで、彼女の宿は、一応俺のアパー
トということになっている」

「それは、ちと危険じゃないのか」

上村が甲高い声をあげた。

「バカをいえ、ホテルに閉じ込めておく方がよっぽど危険だ。そこ
の誰かみたいに、得体の知れないやつがウヨウヨしていやがるから
な。いま、女房とも会って来た。そうしたら、女房の方がすっかり
意気投合しちまってな。自分にもシナリオを手ほどきして欲しい、
なんていい出す始末さ」

「私みたいな者に気遣ってもらい、光栄だわ。みんなにはつつい

頼ってしまつて、済まないと思つてます」

と洋子がいいかけたとき、入口にかすかに光の揺れる気配がして、ワイシャツ姿の河田が入ってきた。

肩のあたりの布地にはまだ陽光が潜り込んでいるのか、部屋の暗さに慣れた俊彦の目には、河田の半身からぼうと燐光が炎え立ったのかと見えた。腕時計を覗くと、三時きっかりである。河田らしい正確さだ、と俊彦は思った。

「工学博士の到着だ」

入口に一番近い上村が立った。明石も、パイプをくわえたまま片肘を捏ね、はずみをつけて立ち上がると、またカウンターをくぐつて入った。

河田は、席をひと渡り眺め、はちきれそうに脹らんだカバンを隣のテーブルに置くと、上村の横に腰を下ろした。

「月曜日からの学会の準備で手間どつてたんでね」

「学会の準備か。さすがに博士は、違う」

上村が、河田に椅子を寄せる。

「全国区をやつでね。千人からが集まる。三十年に一度というやつが、たまたまめぐつてきたのさ。教授は外部との連絡に追われているし、会場の準備や資料づくりだとかが俺の責任になるんで、この一か月、夏休みなんてものじゃなかったよ」

「そいつは悪かった。大丈夫か、教室の方」

明石が、アルコールランプに火を点けながら、パイプをくわえたままのくぐもつた声でいった。

「細々したところは、助手や院生たちにまかせてきた。明日の日曜日に最終点検をすれば、なんとかなるだろう」

「なんといつても、河田が一番の出世頭だ。俺なんぞ、どうにもしがない二流会社の課長だ」

「それはないぜ、上村。俺や、松井へのあてこすりのつもりか」

「そんなつもりじゃない。が、とにかく、河田が大学院に入った方がいいとして、あんなに早く学位がとれるとは思わなかったな。まさに、ストレート勝負だな」

「俺は、色目でしか見られない悔しさを研究にぶつけた。ちくしよ、う、という思いだったね。教授に、学界に、俺の存在を示すには、力でしかないと思つた。煙たい存在だったろうさ、多分」

「それに、多少は運もあった、だな。助教授が失職するという」

「それもある。しかし、助教授がいなくなつたからといって、教室の助手が昇任するという保証はないんだ」

俊彦は、核融合炉のことを学報に掲載した三年ほど前のことを思い出した。その研究室の紹介は教授の名前で掲載されているが、実際は助手の河田の文章であることは、何度も実験室に足を運んだ俊

彦にはよくわかっている。

いつの間にか河田がこんな域にまで至ったのだろう、と驚嘆したものだ。

「河田さんが、一番変わらないわ。わき目もふらずに生きている、っていう感じね」

洋子が、河田を見詰める。

「そうだな、あい変わらず喧嘩っ早いし。明石にいつもいわれる。お前は、いつまでも一点突破だつて。そうなんだよ。いつでも一番強固なところに突っかかっている。自分ながら、下手くそだとつくづく思う。まあ、階級論だけは忘れてしまったけど」

河田の理論構成には、定評があった。それは、天性のものといった方が適切かもしれない。舌鋒鋭く攻めると思えば、形勢が悪いときには相手にいわせるだけいわせておき、一つの反論を機に一気に崩してしまう。最後には、完膚ないまでに叩きのめしてはばからないのだった。

岡藤とはそこが違う、と俊彦は思う。岡藤は、自己批判をすべきときには、敢えてした。相手を攻めるときでも、徹底して攻めるということをしなかった。

この一見脆弱そうに見える岡藤の方にみんなが従ったのは、岡藤の寛容な性格にひかれたからでもあったろう。が、それより、集会のときなどにアジる岡藤には、集団を酔わせる力があった。集団の心の芯に訴え、集団を立たしめることばの悲愴さ、巧みさは、河田にはない党首の風格があった。

しかし、社革の内部を動かしていたのは、河田の論理だったといつてよい。岡藤と洋子の関係を、党の根底を揺さぶり、崩壊に導くもの、として徹底的に糾弾したのも、ストリートな彼の論理からしてみれば、しごく当然のことだったのかもしれない。

俊彦は、机を叩いて岡藤に詰め寄ったあのときの、河田の蒼白を通り越し、どこか鬼気迫るさまだった顔を、眼前の河田に重ね合わせてみた。

「そんなこともあったな」

俊彦は、我に返った。上村のよく太った腹が、波うっている。

「なにかくすぐったいのさ。上村が俺のすぐ後ろにいたから、バカヤロー変なところくすぐるんじゃないやねえ、と怒鳴ったよな、な、そうだったろう。ところがさ、犯人は目の前の機動隊の中にいやがった。ゾツとしたぜ、全く。なよなよした細面てのやつ。とんでもねえ、髭面のごっついおやじ。そいつがドマジな面してよ、俺のあそこを上気した顔で撫でまわしやがる」

「うん、思い出した。明石が、おい、押すな押すなとやたら騒ぐん

だ。あのときは、明石のうしろ足でさんざんむこうずねを蹴り上げられたんだったよ」

「たまらないぜ、はりつけの刑だ。警棒ではぶん殴られるし、冷汗は流れるし。まさかあんなところで、あんな目に会うなんぞ思いもしないさ。いま、人混みの中で出っ喰わしても、あの髭面だけは覚えてる」

明石が、太い煙をカウンタ―に吹きつけた後、への字に曲げた唇をククとひきつらせている。

「その話は少し不謹慎じゃないか」

コーヒ―を口に含んだ河田が、苦々しい表情になり、レジの上の時計をちらと見上げた。笑っていた上村も、口をつぐんだ。

「そうだった。もう、そろそろいい頃だ。みんな、奥へ移ってくれ」

明石は、にわかにも真顔に戻ると、首から吊っていたエプロンはずし、カウンタ―に放った。

「和ちゃんのお手製だ。ほかにはなにもないけどな」

明石は、フロアシャンデリアのスイッチを入れた。

オードブルと寿司とフルーツが形よく盛られ、並べられている。

「岡藤の写真でも置けばよかったんだが、あいつが、俺たちのことをあい変わらずの唐変木の集まりだと笑うんじゃないかと、よしたよ。ま、とにかく始めるとするか」

明石は、何度もカウンタ―との間を行き来し、ビールやブランデーや氷を運んできた。

「明石、ずい分無理したんじゃないか」

コップ一杯のビールで耳朶まで染めた上村が、ネクタイを弛め、シヤツのボタンもはずした。

「俺は、意気に感じる性分だね。洋子から電話があったとき、一も二もなく承知したのさ。実は、俺も岡藤の命日をど忘れしちゃってた。そこで、よっしゃ、四、五人集めようということで、あとは俺の独断というわけだ。しかし、さすが洋子だ。すんでのところで、岡藤のことどころか、自分の能書きまで忘れようとするところを、引きずり戻してくれた」

「私には、取材という下心があつてのことよ。だから本当は、一人でひっそりくるべきだったのかもしれないのに、みんなを巻き込んでしまつて、申し訳ないわ」

「洋子、君のそんなところが気に入らん。確かに、岡藤と君との間には特別なものがあつたかもしれないが、これは俺たちみんなの問題でもあるわけだ」

明石は、上村のグラスに氷を放り込んだ。飲めない上村は、一杯のビールが終わると、ブランデーを舐め始めた。

「じゃ、今日の集まりは明石、君の発案ということでもいいのだな」
突然、不快そうに河田が眉を上げ上げた。目が少しすわっている。
飲み始めた頃から不機嫌そうな様子だった河田には、もともと酔う
とからむ癖がある。

明石と上村が、軽く目くばせをした。

「ああ、そうだ、これは俺の発案だ」

「それならいい」

河田の眼鏡の奥で、シヤンデリアの灯が赤く光った。

しぼんだ空気が部屋の底を流れ始めた。

上村は、俯いたまま一口、また一口と、せわしなくブランデーを
舐める。明石は、腕組みをして、天井を見上げている。洋子は、テ
ーブルクロスの一点に目を落とし、動かない。

河田は、つかんだ寿司を鉢の端まで運び、箸の先でつついていた
が、そのまま箸をひっ込めてしまった。

「誰が発案したかなど、関係ないじゃないか。今日は岡藤の二十周
忌だ。違くないだろ」

俊彦がいった。それでもいわないことには、垂れ込めた空気に、
みんな圧しつぶされてしまうのではないか、と思えたのだった。

「そうだな、そうこなくっちゃ。岡藤だよ、岡藤。やつのために乾
杯だ。われらが同志、永遠の青年、情熱のマルキスト、岡藤のため
にな。ああ、その前にちよっと待ってくれ」

明石は、さし上げかけたコップをガタリとテーブルに下ろすと、
椅子を立ち、入口のフロアの方に小走りに駆けていった。が、すぐ
にまた戻ってきた。と同時に、乾いたピアノの曲が、地の底から湧
いてきたという具合に、低く流れ始めた。明石は、コップをわしづ
かみに持ち上げると、

「マル・ウオールドロンだ。ウオールドロンのレフト・アローンだ。岡
藤のやつが好きだった、ウオールドロンのレフト・アローンだ。岡藤、
聞こえるか」

明石は、俊彦や洋子のコップに自分のコップを勢いよく合わせる
と、一息にあおった。そして、体をそらせ大きく息をついた。

「レフト・アローンか。なにかこう、魂が冷えてくる曲だな。岡藤
のやつ、よく一人でジャズ喫茶に入っていたんだった」

上村が明石に話しかけたが、明石は椅子に深く背をもたせたまま、
目をつむっている。洋子も、ビールを一口口にした後、テーブルク
ロスに目を落としたままだ。

俊彦は、明石の演出に救われたと思った。河田のペースになって、
筋論でからまれるより、いまは深い思いに沈むことの方がいいと思
った。

俊彦も、ジャズ喫茶にはよくいった。デモが終わった後や、アル

バイトの帰りに一人で寄った。

重い鉄のドアを開けると、穴蔵同然の暗さの中に客が座っていた。天井までたちこめる煙草の煙と、腹の底から突き上げてくる強烈なリズムのただ中で、客たちは全く一人なのであった。

俯いている者。指先で小刻みにテーブルを叩く者。ノートの端になにかを書きつけている者。肘が触れても知らぬ気に、彼らは己れにひたひたきっていた。

そんな中に、俊彦はよく岡藤を見かけたのだったが、無論岡藤の心の内が覗けるわけもなかった。ただ、激しくアジったデモの後で、岡藤が何度となくこのレフト・アローンをリクエストするのを、胸を突かれる思いで聴いたものだった。

「岡藤のやつ、あの夜もこの曲を聴いたのかもしれない」

明石が、目を閉じたままつぶやいた。
「きつとそうだ。この曲をじつと聴いていると、岡藤の心が大方読める気がする。」

あの日は、夕方から雨になった。デモが済んで公園で別れるとき、今夜はTホテルに泊まるといった。確か、人に会うんだとかいってたな。俺はてっきり、洋子と約束ができてくるものと思っていた。

やつは、俺たちと別れた後、きつとこの曲を聴きに行った筈だ。この魂の消え入りそうな曲をな。そして、Tホテルに向かった。ここまでではわかるんだ」

明石は、いつにない沈んだ調子で、記憶の端をたぐり寄せるかのごとくに、ことばを拾っていく。

河田は、一人手酌を重ねている。

「なぜだ」

明石は、溜め息をついた。そして、急にいたたまれなくなつたというふうに、点けたばかりのパイプを灰皿に打ちつけた。

「河田、河田先生」

河田は、先生と呼ばれたためか、唇を明石に向けて突き出しかけたが、眼鏡の奥の目を薄く光らせただけで、なにもいわなかった。

「河田、確かあの日は、社革の武闘路線は間違っている、このままではおしまいだ、といった」

「ああ」

「お前は副委員長だった」

「それがなんの関係がある」

河田の語気が、鋭くなった。

上村が、あわてて明石の膝を揺すった。

「副委員長の、それがどうした」

「待て、そうむきになるな。俺はな、いまさら事件をほじくりかえすつもりなど毛頭ない。ただな、岡藤がどんな気持で逝ったのかと、

そいつが知りたいたけだ」

「僕もそれが知りたい。確かに、安保に破れた。パリストにも破れた。疲れていた。でも、そんなことが原因だろうか。僕たちは、キヤンパスを追われはしたが、公害闘争に活路を見出していた。駅にもカンパで立った。M病を告発する会と連帯して、裁判にも出た。ハンストもやった」

俊彦は、明石と河田の目を交互に見詰めながら、一気にまくしたてた。

「俺たちの前に、まだ目標はあった。決して袋小路じゃなかった」

明石は、遠くに視線を移し、顎髭を撫でまわし始めた。「しかし、あの日の岡藤のアジが気になる。確か、M病患者は、自分がこの手で殺したんだ、と。手をつかねて黙って見ているこの手で、この自分自身の手で、殺したんだと」

「やめろ、なんになる。いまさら、そんなことを詮索しても始まらない」

河田が、音をたてて席を立った。カバンをつかんで、すぐにもとび出さんばかりの勢いである。

「ちよつと、ちよつと待ってくれ」

出口に歩きかけた河田を、椅子から転がり出た上村がおしとどめた。

「冗談じゃない。死んだやつを数えて、なんになる。やつはやつだ。俺達の知ったことじゃない。死にたいやつは、死なしておけばいい」

「河田、よくもそんなことがすらすらいえるな。お前だって、あの日は、口もきけないくらいにまいつていたじゃないか」

「まいつていた。そんなこと、とうに忘れたよ。二十年も昔のことさ。変わったんだ、なにかも。それがわからないのか」

河田の頬は青ざめ、唇が小刻みに震えている。「わからないんだ、俺には」

明石が、静かに首を振った。

ピアノの曲は、さらに深く澱んだ川となり、部屋の底を静かに流れていく。

「悪かった、君のいうとおりかもしれない。ひき留めはしない。しかし、この曲が終わるまでせめていてくれないか、頼む」

「曲が終わるまでだ。俺は、この曲を聴く度に気分が悪くなる」

「ごめんなさい。私がいけなかった。私がこんなこと、思いついたばかりに」

「そんなことはない。洋子がいけないことはない。河田だって、思いは同じ筈だ」

「洋子君、俺は、君がいまさら岡藤のことをいう資格はないと思っ

ている。その胸に手を当てて考えたらわかるだろう」

河田は、洋子を見据えた。酔いのきざしを含んだ鋭い目が、洋子の視線にからみつく。

視線を伏せてたじろいだのは洋子の方で、急に首をうなだれ、俯いてしまった。

「帰る」

河田は、そのままフロアを突つきり、大股で出ていった。

日曜日の大学の構内は静まりかえっている。

いつもだと、広いキャンパスは、無秩序に駐車した車で埋まり、白衣の教員や学生たちがいき交っているのだが、日曜日になると門は半ば閉ざされ、建物という建物の窓も、ゆっくりと流れ過ぎる雲を映すだけの役割しか果たさなくなってしまう。

柵の外を往来する車の列や、人の数も、普段とは比べものにならないほどまばらになってしまった。

大学街、とはよくいったもので、大学が活動していないときのこの街は、まるで郊外のベッドタウンより森閑としている。足音をたてるのさえ気がひけてしまう、と朝の街を抜けてきたばかりの俊彦は、そう思った。

頭がくらくらするほど痛く、重たく、胃のあたりには不快なむかつきが残っている。

俊彦は、昨夜何時まで飲んでいたのか、どうやってアパートまでたどり着いたのか、記憶がなかった。河田がむげんだいを去るまでのことははっきり覚えているのだが、それ以降が空白だった。ただ、おぼろげながら、どこかで洋子の手を握って別れた気がした。

その洋子を待っている。俊彦は、通用門を見下ろす植込の陰に腰を下ろし、バスでやってくる洋子を待った。

「ご機嫌いかが」

つい一時間ほど前だった。いつまでも鳴りやまない電話のベルに、へばりついた重たい体をやつとの思いでひき摺って出ると、明石の妻の声が遠くでささやいた。

「明石など大変。夜が明けて帰ってきたと思ったら、寝付きもしないうちにゲーゲーやり始めて、まだ腰が立たないといってますよ。とても、お盛んだったそうですね」

「ごめんさい。あんな乱暴なこといって、怒ってるでしょう」

「怒ってるって」

「本当に、ごめんさい。反省してます。もう、許してはもらえないかしら」

なんのことだか、わからなかった。乱暴なこと。そんなことを、

洋子の方から一方的にいい出すわけがない。だとすると、なにか自分のほうから、洋子を刺激することでもしでかしたのだったろうか。俊彦は、二日酔いの朝に決まって感じる、茫漠とした、とりかえしのつかない、いつもの憂鬱な気分に陥り始めた。

「ごめんなさい。きつとどうかしてたの」

「僕は、その、なんとも思ってたやしないから」

俊彦は、わけのわからないまいう。「なんとか許してもらえないまいう。それで、厚かましいお願いだけど、今日会ってもらえるかしら。それで、構わないよ」

「本当、ありがとう。じゃあ、十時過ぎにはそちらに着くわ」

俊彦は、枕元の目覚ましを覗いた。八時半を少しまわっていた。十時過ぎに大学の通用門で待つ、という約束をし、俊彦はふらつく体をやつとのことと支え、アパートを出てきたのだった。

初秋とはいえ、まだ真夏の激しさをもつ日差しが、薄い雲の切れ間から強烈に静まりかえった構内を焼き始めた。

シュロの葉陰に身を寄せ、縮こまって座っている俊彦の周囲にも、ぶ厚い光の塊が、荒々しい粒のままに降ってくる。風も激しく、アスファルトの砂塵を巻き上げ、音をたてて吹き過ぎていく。

俊彦は、腋の下からにじんでくる汗の気味の悪さと、度々襲ってくるめまいとに必死で耐えた。人を待つことで、こんなに辛い目に会ったことはかつてなかったと、昨夜の酒が腹立たしかった。

「待った」

いつの間に来たのか、パンタロン姿の洋子が、俊彦の前にすらりと立った。それはまさに、華やかな花卉をもつ、すべすべした一本の植物が、ふいに目の前に飛来してきたのかと思える唐突さで現われた。

「そんなに待っていない、と俊彦はいおうとした。

「あ、ずい分顔色が悪いわ、大丈夫」

「なんともないよ」

「そんなことない。真っ青だわ」

「いや、大丈夫」

そういう自分のことばが、どこか遠くの方で聞こえるのを、我ながら情けないと思った。

「少し休みましょう。これでは無理よ。ね、そうした方がいいわ」

どこだろう。

ブラインドを洩れてくる光の痛さに、我に返った。低い天井、天井扇、しみの浮き出たたまご色の壁。

俊彦は、ゆっくりと上体を起こした。

総務課の部屋である。

「気分、どう」

洋子が、ソファの向かい側の椅子に浅く腰をかけ、白い歯をみせている。

「呼びかけてもわからないくらい眠っていたわ」

「悪かった」

「こんなに早くから押しかけてきた私がいけないのよ。昨夜のみんなの飲みっぷりたら、すごかったんだもの。上村さんも、きつとダウンね。飲めない人があんなに」

「あんなに」

「河田のやつめ、ちくしよう、へなちよこめってやりだして」

「そうだった」

俊彦の目に、不透明な記憶の糸口がおぼろ気に見え始めた。

明石と上村が肩を組み、どこかの階上のパブに入っていた。そして、自分は。

「この部屋、見覚えがあるわ」

洋子の弾んだ声が、苦い思いに落ちかけた俊彦の気持をそらしてくれた。

「大学法するとき、学長をかん詰めにして」

「あの頃まで、この部屋は会議室だった」

「この部屋を三日間占拠したんだったわ」

「A派の連中が、それから三か月も封鎖していた」

俊彦は軽く頭を振った。腕をゆっくり伸ばしてみた。疲れはない。胃のむかつきも治まっている。

「でも、すっかり明るくなつたみたい、この部屋」

「改修工事を大々的にやってね。すっかり汚点を払拭したつもりなんだ」

「つもり」

「それが面白いんだ。天井も壁も廊下も、みんなしつこいとやらで塗り込めてしまったのに、ロッカーや机を裏返してみると、安売粉砕、闘争勝利てのがいくらかも残っている」

「それを平気で使ってるの」

「もちろんさ。そんなところまで無駄金を使っちゃいけないからね。全部やり替えたくてもやれない、というのが本音だろう」

俊彦はソファから下りた。間近にある洋子の視線に、急に息苦しさを感じたのだった。

「すると、松井さん、いまのあなたは全く反対の立場に立ったってことになるのね」

洋子は、懐かしそうに、部屋の周囲に立てられているロッカーの

角のあたりを眺めている。

俊彦は、洋子に背を向けると、音をたててブラインドを端まで巻き上げた。南に面したその窓からは、揺らめく光の洪水が、小踊りしてとび込んできた。

「それをいわれると、困るんだ。自分でも、どうにも収拾がつかない。昔どろぼう、いまはおまわりってとこかな。このバランスがうまくいかない。もっとも、いまの立場といっても、僕らがこの建物にシンボライズしていた頃のあの役割は、全然果たしていないと思うよ、幸いなことに」

「学内が平穏だから」

「学長、評議会、教授会という図式はなんら変わりないけど、以前の権力と違ったとらえ方は、内からも外からもなされていない。だから僕らも、自ら官僚という意識は殆どもたずに済んでいる。ところが、それが一番いけない。この頃は、糠に釘を打ち込むほどのた易さで、露骨な統制が始められている」

「松井さんの心中」

「穏やかでないよ。誰か騒いでくれ、と祈ることもある。が、なにも起こらない。すんなりいってしまふ。河田のいうとおり、二十年という時間が、本当になにもかも変えてしまったのかもしれない。つくづくそう思うことがあるんだ」

「信じられないけど」
「だけど、そうなんだ。こんなこといっていると、古くさいやつだと相手にもされない」

俊彦は、書き散らしたわら半紙を放ったままにしている自分の机を振り返った。佐川のさっぱりと片付けられたひとまわり大きい机が、俊彦の机を見下ろしている。

「君がいった資料だけど」

俊彦は、ロッカーの扉を開くと、少し黄ばんだ背表紙のスクラップ帳をひきずり出した。

「二十冊ぐらいあるかな。こんなものでどうだろう」

洋子は、通し番号のうたれたそのなかの一冊を手にとると、急いでページを繰った。そして、「K大社革委員長自殺」という太字の見出しに目をとめ、じつと記事に見入った。

「井熊さんと呼んだ方がいい」

記念館の二階から下りてきた俊彦がいった。遅れて出てきた洋子は、まだ階段の中途に立ち止まって、大講堂の入口を見上げている。

「お休みの日でしょ、ご迷惑じゃないかしら」

「住まいがすぐ近くだから、いたら多分なんとかなると思う」

俊彦は、一階の生協食堂の赤電話に走った。食堂には、昼時をか

なりまわっているとはいえ、二百人ほどのテーブルに、数えるほどしか客はいない。動くものといえば、レジの上に「生協強化月間」と書かれた一枚のプレートが、空調の風にかすかに揺れているだけである。

単調な呼出し音が回数を重ねていく。十回、十五回。いないのかもしれない。と、受話器を離しかけたとき、押し殺した低いしわがれ声が答えた。

「わしに用がある。妙な話じゃ。昔のことを、いまさらほじくり返さんかてええじゃろうに」

俊彦の頼みに、しばらく考え込んでいる様子だったが、嫌だとはいわなかった。三十分ほどで着く、ということだった。

「わざわざきてくださるなんて。本当は、こちらから訪ねていなくてはいけないのに。訪ねていくのだから、嫌がられるかも知れないのに」

洋子は、何度も同じことばを繰り返した。

「いいんだ。あの人はそういう人なんだ。君も遠慮せず、いくらでも聞いたらいいい」

井熊は、経済学部の事務長の前は、文学部の事務長だった。つまり、岡藤が教養部から一年半で進学してきて、三年次を終わるまでの一年半の期間、文学部の事務長で過ごしたということになる。

洋子が、文学部の関係の方はいらっしやらないかしら、といったとき、俊彦は、すぐに井熊を思い浮かべたのだった。

「この記念館は工共闘だったわね。河田さんたちの」

洋子は、楠と南京ハゼの並木の葉陰にあつて、青空を背にそびえたつ記念館を、まぶしそうに見上げている。

「河田は、彼らとはあまり行動を共にしなかった筈だ。河田の論理と、工共闘の非論理とはうまくかみ合っていなかったからね」

「鉄パイプでスト破りにきたB派を、斧で撃退するという事件もあった」

「マサカリ事件ね。河田は、あれには怒った。一歩間違えば、人命にかかわる。工共闘は蛮人の集まりかってね。でも、あの状況の中では、河田の論理も通用しなかったんじゃないかな」

「社革の中でも、暴力はほどほどにしろって」

「血の気の多い明石や上村から、お前はD派のまわしものか、とつるしあげられて憤慨していた」

俊彦は、昨夜の河田の激昂したさまが、以前とちつとも変わっていないのに、微笑ましささえ感じた。自説を曲げぬということでは、明石や上村や、おそらくは岡藤より数倍も勝っているのではないか、と思った。

「家内に寝込まれてなあ」

井熊は、ゴム塩頭をかいた。糊気のないシャツの衿が左右不揃いに垂れ、素足にゴム草履という格好である。しかし、顔の色は日に焼け、ずい分たくましく見える。

「朝から晩まで百姓仕事だよ。合間には句をひねったりして、結構暇をつぶしている」

「申し訳ありません。お忙しいところ」

「いやいや、この頃はあまり声をかけてくれるやつもなくなつてな。少々ボケ加減じゃった」

井熊は、タオルで首筋の汗を乱暴にこすった。

「こんなわしになんの用かな」

「文系までいこうと思うのです。構いませんか」

俊彦は、着いたばかりの井熊に、なお一キロばかりの道のりを強制しなければならぬことを心苦しく思った。この大学本部や記念館のある理系のキャンパスと、俊彦たちの在籍した文系のキャンパスとは、いまは廃止されてしまった市電の通りをはさんで、南北に分かれている。

「足ならこのとおりピンピンしている。昔よりはよっぽどましだ、ほれ」

井熊は、ゴム草履の裏を鳴らしながら、先にたつて歩き出した。

「大学にくることも、めったになくつてのう。四十年も暮らしたキャンパスが、辞めた途端に、まるで他人の庭みたいによそよそしく見えてしまう」

「わたしだって同じです。卒業した学校だというのに、よけいに遠さを感じます」

「原因は、僕らの方にあるのかもしれないけどね」

「怖くって、一人では入れないという」

「わしにもあるな。すぐ傍にある分、その、ギャップというものの強さを感じる。まあ、わしの場合、齢のせいだろうと思うているが」
齢のせい、という口の割には、井熊は二人を数メートルも離して先に歩いていく。もう七十歳に届こうとしている筈であるのに、歩く速さは二人より速い。

T字路を折れて、琉球竹の茂みの傍を抜けると、やがて小じんまりした文系のキャンパスが見えてくる。

「身が引き締まってくるよ。やつぱり、体が覚えているんだ、この道は」

井熊が、コホンと咳払いをした。

「怖さと恥ずかしさが、足を伝ってきます」

洋子が肩をすぼめる。

かつてこのあたりは、砂浜の続く松原であったという。その名残

はいまでは殆ど見ることができないが、浜を埋め立てて造成した工場団地を渡ってくる海風の強さには、当時の面影がとどめられているという。

そのとき、あたかも三人の行く手をはばむかのごとく、一陣の熱風が真向うから襲ってきた。風は、鋭いうなり声をたて、三人の影を吹き千切り、渦巻きながら通り過ぎていった。

中庭の噴水は涸れていた。文系の建物は、この噴水を中心に、研究棟、講義棟が、廊下を連ねてH型に並んでいる。狭い空間には殆ど樹木もなく、目を和ませるものといえば、噴水を囲んで低く刈られたつつじの植え込みがあるくらいで、いまは、その花もとうに時期を過ぎている。噴水池には、魚の影も見えない。

「やれやれ、殺風景なところだけはちつとも変わっちゃいない。でも、ここまでくると、不思議に落ち着いてくるのはどういうわけだ」井熊は、植え込みの中のコンクリート造りのベンチに腰を下ろした。

二十メートルと離れていない北側の国道を、大型トラックが埃をけたてて過ぎていく。ワンマンバスの車内案内まで、風に乗って聞こえてくる。

俊彦は、洋子の姿が見えないのに気付いた。廊下の柱の陰にも植え込みのあたりにも姿がない。遅れがちに歩き始めた洋子を、ほんのいままで確かに後ろに見ていたのに、ふいにアスファルトの路上から消えてしまった。

「寒々としてやがる。ビラもない。壁なんかまっさらみたいじゃないか。これじゃ、博物館だな」

井熊の目は、何度も講義棟を上から下まで見渡し、苦笑している。「お前さんたちの頃は、剥がしても剥がしても貼ってきよった。水をぶっかけ、棒タワシでこすってな。やっそこっちの壁が済んで裏にまわったと思うと、元の壁にはまた新しいやつが貼られている。いやあ、すばしこいのなんのって」

「A派のビラの上にB派、その上にC派というふう組織をあげて」
「そうそう、そのまた上にA派、その上にD派という具合にな。あつという間もなく、四、五枚を重ねて貼っていく。それに、落書きがすさまじい」

「懸命でした。どの派も、自分たちの存在をアピールするには、情宣活動に遅れをとってはならないのです」

「内ゲバも毎日。わたらの見ている前で、ものすごい形相をして角材で殴りかかっていく。そうになると、もう手がつけられん」

「数です。数をつかまねばならない。その数をつかむためには、他派より一人でも多くの数が必要なのです」

「それはいえるな。そいつは、いまの世の中すべてにいえることだ。数と金、だな」

「しかし、数の不足を武器で補い、圧倒しようという派も現われませんでした」

講義棟と、一つだけ講義棟からはり出して建てられた大講義室との間の狭い通路から、洋子が草色のパンタロンの裾をひるがえしながら出てきた。小さなシヨルダーバッグを片手に下げ、日差しをハンカチで遮り、小走りに駆けてくる。

「ごめんなさい。ちよつと部屋を覗いてきました」

鼻の頭にうつつら汗を光らせている。

「社革の部屋は、軽音楽研究会だとかの部屋になってるんですね」

「そう。パーティーを専門にまわっている」

「ずい分、カラフルにドアなんか飾ってあるの」

「社革は終わった。岡藤に始まり、岡藤に終わった」

「以前と同じ部屋に、あの頃と同じクラブの名札がいくつもかかっていたわ」

「時代の流れに、あまり左右されないクラブがある。そいつらは、そのときどきに必要な、最小限の変化を繰り返しながら、しぶとく生き残っている」

「生まれては、すぐに消えていくものもある」

「で、岡藤とかいったな」

井熊が、ふいに俊彦のことばを遮った。どこか、遠いものを見詰める表情である。

「その岡藤という名前です。思い出したんだが、確か独文に岡藤という」

「ええ、実は、岡藤真一のことわざわ井熊さんにきてもらったんです」

「岡藤真一だったかな。わたしには、はっきり覚えていることがある」

洋子も、ベンチの端にそつと腰を下ろした。

「確か、囊の舞い始めた、作家のMが自決してすぐ後のことだった。四、五人の学生が、一人の男を引き摺りながら教室から出てきた。とうに講義は終わっている時分だったから、六時はまわっていた筈だ。」

わたしは会議の後の打ち合せを済ませ、みんなと別れていつもの道を帰っていた。ところが、外に出てみると寒い。びろろな話じゃが、急に便意を催してな。いつもは使ったことのない教室の横の便所に駆け込んだ。

かなりの時間、さし込んでくる寒気に素肌をさらしていたこともあって、わたしは歯の根も合わないほどの震えを感じていた。

冷えびえとした色に光る電気を消して、そこを出ようとしたとき

だ。廊下にただならぬ怒声を聞いて、出しかけた首をあわててひっこめてしまった」

井熊は、寒そうな身振りで首をすくめてみせた。

「鈍く光るものを見たんじや。それが、日本刀であると気付くまで、しばらくの間わしはぼんやりしておった」

「日本刀」

「角材とか鉄パイプならいつも見ておるし、すぐにわかるんだが。一人の男が白木の鞘をはらって、囲まれている男の首筋に、ぴたりと切っ先を突きつけた。

最初、彼らがふざけているのかと思つたほどだ。叫んでいるのは、包囲側の連中ばかり。『そんなに死ぬのが怖いか』、『Mの死がわかる。しかし、そのためえ本人が死ぬのが怖い。どういうことだ。貴様のいうことは、全く破産してるぜ』、『一派の委員長ともあろうやつが、たいした腰抜けだ』と、せせら笑っている。

囲いの中の男はというと、左右から絡められたまま、身動きもせず、平然としている。

とうとう日本刀の男がしびれを切らしたのか、『ブタ野郎、M同様に、ひと思いに殺つてやる』と、切っ先を天井にはね上げた」

「そいつは、B派の連中だ」

俊彦が、勢い込んでいった。
「ちつとも知らなかった」

「ところが、おもむろにしゃべり始めたのじや。その真中の男がね。『死ぬことは、無に落ちるということだ。絶対無限の無だ。ひき返せないのだ。それを選ぶには、並大抵の覚悟でできるものではない。俺たちに、それだけの度胸があるか。死を賭して、俺たちは闘ってきたか。数の力を頼りに、われわれはバカ騒ぎを繰り返してきただけではないか。そういうことすべてを、いま己れに突きつけてみる必要がある。自分は、そういう意味でMを評価する』とね。

それを聞いた男たちは、見たことかとあざ笑ひ、『安っぽい観念論をほざくな。Mの死なんぞ、自己満足のお遊びだ』、『ブルジョア野郎が、ほんの一人くたばっただけだ。われわれ同志が、これまでどんなにむごたらしい殺され方をしてきたか、忘れたか。貴様、それでもてめえら一派を革命軍呼びわりするつもりか』、『まさに、敵は間近にいるという。密かに内部に潜入してくる、という。そいつを、真先に抹殺せねばならぬ』、『殺れ』と、火がついた連中は叫び出した。そして、一瞬不気味な緊張がみなぎった」

このとき、頭上にふいに翳がさしたかと思うと、轟音とともに、ジェット機が低く、荒々しく三人に迫ってきた。

ジェット機は、水平翼の一つ一つのつなぎ目がはっきり見えるほどの低さまで頭上に迫ると、金属音をけたて、講義棟の屋根に巨大

な影を折りながら、ゆっくり南へ抜けていった。

洋子は目を閉じている。

音を失った井熊の口元が、所在なげにこころもち開いている。

「わしは、後先も考えずにとび出していった。わけのわからない、悲鳴に似た叫びをあげてな。十メートルと離れていないのに、その遠いこととまったく違う。」

しかし、わしの不意打ちは効果があつたとみえて、虚をつかれた連中は腰がくだけてしまった。とにかく、逃げ足の速いこととまったく違う。あつという間に闇の中だ。

わしは、いっぺんに緊張がゆるんだせいか、尻餅をつきそうになつた。ぼうつとしてな。そこに、男がいるのに、改めて気付いたという具合だ。

その岡藤だが、うつすら蒼ざめた顔で、ぼんやり突っ立っている。そして、なにもいわず、ふらつく足取りで廊下を出ていきよつた」

井熊は、渡り廊下を抜け、小さく芝のはつてある裏庭を抜けて、文学部の事務室の窓の下に立った。そして、すりガラスのはめ込まれた窓を軽く叩いた。

「君たちは知っているかどうかしらんが、岡藤は、なんとかいう病名の、生まれつきの心臓疾患ということだった。それも、学医の教授から聞いたんじやが、あまり質のよくない、ひよつとすると永くはないかもしれんという」

「あの、ポックリいくことがあるいう」

「こいつを知っていたのは、本人と、学部長と、独文の教授と、あと二、三人というところじゃった」

「信じられん。岡藤は人一倍タフだった。どうかすると、明石や上村よりタフだった。君はどう思う」

洋子は、目を伏せたまま、静かに首を横に振った。

「だからわしは、いつもそれとなく彼の動きを見ていた。だが、自分の聞いたことが全くでたらめじゃないかとさえ思い始めていたんだ」

「岡藤は、社革を生み、育てた。A派やC派と連帯して、デモの先頭に立った。学生大会は、徹夜になることも度々だった」

俊彦は、次々に浮かんでくる、精神的だった岡藤の行動を思った。それは、打ち消そうとしても消せないほど、強烈な印象で俊彦の胸にやきついていく。

しかし、ときおり、岡藤は一人にこもるときがあつた。ジャズ喫茶で見かけるときなど、人を寄せ付けない厳しさがあつた。

ときには、信じられないほどの弱みをみせて。M病患者の子供を抱き上げるときは、流れる涙を拭いもせず、頬に滴らせていた。

「遠くない将来、あの青年がいなくなるのかと思うと、わしはやりきれなくてな。なにかてだてはないのかと、学医の教授に何度も尋ねたもんじゃ」

井熊は、グスツと鼻を鳴らした。

「岡藤の家は、事務機器販売を手広くやっているかなりの資産家だそうだ。で、いくら金をかけてでもと、あらゆる手は尽くしたらしいが、妙案はなかったらしい。普段はたいした自覚症状もないらしく、本人も無為の病院暮らしは嫌だというので、当人の自由にさせていたらしい。わからんもんじゃ。いくら金があり余っていたって、一人息子の命を伸ばすことなどできん」

俊彦は、社革の中で、作家のM事件の総括をしたときのことを思った。

岡藤は、Mの死がわかる、といった。自分で自分を始末できる人間はすばらしい、ともいった。自分たちが数を頼みに、血みどろになつて闘ってきたことさえ、Mの前には虚しい、とさえいった。

これに、河田が猛然と反論した。卑怯な、安易な逃避にしかすぎない。腰くだけの観念論だ。と、つかんでいた灰皿を机に叩きつけ、取り巻く俊彦たちにも殴りかからんばかりだった。

俊彦は、直線的な河田の論法に、いつもうんざりしてしまうのだった。このときばかりは、河田のいい分の方が正しいと思つた。生きて、闘つて、われわれの目指す社会への橋頭堡を築いて、とそう単純に考えるとき、岡藤のいう自分で自分を摘みとるということばは、不謹慎でしかないと思えた。岡藤は、Mの演技過剰とも思える美学にとうとう感染してしまつたのか、と他愛もなくそう考えた。だが、岡藤のことばが、自らの近い将来のことを避けることができないうものと感じての逆説だったのだとしたら。

俊彦は、一時間遅れて出勤した。課のドアを開けると、課員の目がいっせいに振り向いた。なかでも、佐川と、正面の補佐が、あからさまに不機嫌な表情を見せ、課長席の方に体をよじつた。

「遅くなるならなるで、電話ぐらいよこしたらどうだ」

佐川のことばが、俊彦の胸を鋭く刺す。

同僚たちみたいに、市役所に用事ができたのでとか、少し風邪気味で病院に寄つてきたとかいって、鼻を鳴らしたりするなどの芸当は、俊彦にはできない。そんなことをして遅刻するぐらいなら、丸一日休んでしまった方がいいと考へてしまう。

あからさまな嘘を並べる同僚には、女子職員が、熱があるのだつたら無理しちゃだめよ、などと見え透いたことをいいながら、お茶を運んでくる。

「困つたよね、君には。学位論文一覽のところの初校は、いつでも

るんだ。間に合わなかったら、どうするつもりだい」

三十人の課員をバックにしたという強味からか、佐川の声はいつになく大きく、ねっとりからみついてくる。

「すぐに大丈夫です」

「だいたいだよ、君もこの大学の学生として、一度は席を置いた人間だ。まともにもやってくれたら、それだけのことは認められる立場にあるんだ。少しは大人になってもいい筈だろ。それともなにか、ぼくのやり方が気に入らないとでもいうのかい」

「そんなことは」

「じゃ、なんだ。いつまでも係員のままでいるっての」

いくら係長という立場であるとはいえ、こうもいいにくいことを常々いつてくれるということは、むしろ感謝すべきことなのかもしれない。俊彦は、本当にそう考えることもある。それほど、佐川のことばは、俊彦の一手一投足に向けて発せられる。

俊彦は、何度も同じ字面の上をすべっていく赤のボールペンを捨てて、立ち上がった。

壁際のロッカーを開くと、昨日の資料棚の中から、洋子が手にした古いスクラップ帳を取り出した。

二十五日早朝、中央区のTホテルの五階、五二四号室で、K大の「社革」委員長岡藤真一さん(二二)が、浴室のシャワールの留め金に浴衣のひもをかけ、首を吊って死んでいるのを、同委員長河田哲郎さんが発見し、中央署に届け出た。同署の調べでは、岡藤さんは昨二十四日から宿泊していたもので、死亡推定時刻は二十五日午前一時頃とみられる。原因等については、現在調査中であるが、河田さんら関係者の話では、全くこころ当たりがないという――

このあとに、社革についての簡単な説明が続いているほかは、事件の詳細や、岡藤の人柄についてはなにも触れていない。

これまで、何度も見てきた紙面であるが、俊彦は改めて一字一句をたんねんに拾いあげてみた。しかし、いくら読んでも、井熊のいったほどのことは、どこからも読みとることができない。とおりにっぺんの事件の、とおりにっぺんの記事に過ぎない。

心臓疾患というのが事実であるとすれば、岡藤自身、そんなに永くない、ということを知っていたのであろうか。それを知った上で「自決」であるのだろうか。そして、洋子は。

洋子は、わざわざ井熊を呼んだにもかかわらず、自分からはなにも詳しいことを尋ねようとしなかった。黙ったまま俯き、井熊の話聞いていた。レンガ色のTシャツの背中を丸め、じつとまばたきを繰り返すだけだった。

井熊と別れたあとも、「今日は迷惑をかけたわ。ごめんなさい、

このまま帰らせて」というなり、後ろも振り返らず、大学裏門のバス停に駆けていった。

そのときは少し勝手過ぎる、と腹立ちを感じはしたが、青桐の並木の向こうに消えていくバスを見送っているうちに、俊彦にも洋子の胸の内が見えるようで、元の道を一人ひき返したのだった。

岡藤の心臓疾患のことは、明石も上村も知らないに違いない。知っている筈がない。

「冗談はよせよ、委員長殿」

明石は、岡藤がバリストも破産だ、と吐き捨てたとき、傍にあつた丸太で、いやというほど岡藤の尻を叩きあげたことがあつた。

そして、焼酎の一升瓶を抱えてくると、岡藤の前にドンと据えた。岡藤自身も明石のやり方は心得ていて、明石にはやっぱりかなわんな、と苦笑しながら、生のままの焼酎をたて続けに二杯も空けて、おもむろに明石の胸元に、その湯呑を突き返した。

岡藤の酒量は、おそらく社革ではナンバーワンではなかっただろうか。俊彦も明石も、ボトル一本ぐらいは空けるのだったが、あとがだらしない。

明石は、めちやくちや陽気に騒いだかと思うと、飲み屋であろうが、道端であろうが、お構いなしに寝てしまう。

俊彦は、飲んでいるときはなんともないのだが、明け方になって猛烈な吐き気に襲われる。そして、いったん吐き出したら、決まって昼過ぎまで止まらなくなる。しまいには足も腰も立たなくなるほどに、体力という体力を使い果たしてしまう。

その点、岡藤の胃はどういう仕組になっているのか、なに一つ口に入れずただ飲んでいただけなのに、殆ど足元も乱れない。酔って、判断を誤るといふ醜態を見せたことがない。おそろしく早いピッチで、明石や俊彦をひき離しておいて、それでいて、最後までちゃんと座っている。

「松井君、至急いってくれ」

佐川が、俊彦の背中に命じた。

「工学部の原子核だ。一時の開会に遅れぬようにな」

俊彦は、椅子に肘をのせ文庫本を読んでいる。時計の針はまだ十二時三十分を指しているというのに、五分もあれば届く会場までのことを、佐川は催促する。いまからすぐに出かけたんでは、着いてからの時間ももて余すし、休み時間だって無駄になってしまう。それになにより、俊彦は、河田と会う時間を、少しでもあとにひき伸ばしたいのだった。

「少し早めにいって、できたら教授か助教に直接会った方がいいのじゃないか。進行の具合も頭に入れておいた方がいいだろうし。」

今回は、本学の研究班が開発した超目玉の発表が行われるというかならな

佐川は、執拗に話しかける。

それだけの情報を握っているのなら、佐川自身が出かけてもいいじゃないか、とつい毒づきたくなる。

「いきまず、すぐに」

文庫本を乱暴に閉じると、俊彦はのそりと立ち上がった。そして、金庫の中から一眼レフをとり出し、ストロボを組み立て始めた。十円玉で留め金を絞めあげ、電池を放り込み、シンクロコードをつなぐ。ずい分スローモーに見えるが、実際は二分とかからない。

俊彦は、手帳をもち、左肩にカメラをぶら下げ、課長と補佐の碁を覗き込んでいる佐川の横顔をべつすると、部屋をとび出した。

古びた赤レンガの玄関を入ると、すぐ右手のエレベーターの入口に、受付のテーブルがある。開会二十分前ということ、受付にはまだ四、五十人が細長い列をつくっている。テーブルでは、五、六人の係員が名札と、資料をそろいの手提げ袋に入れ、一人一人に渡している。

プラスチックの名札を左胸につけ、赤と青の二色刷りの手提げ袋をかかえてたむろしている出席者たちや、テレビカメラを担いだ報道関係者たちの間を抜け、俊彦は会場の階段教室にすべり込んだ。

後ろにさがるにつれ次第にせり上がっていく階段教室には、すでに満員に近い会員たちが席を占めていて、空調のよくない部屋は、人いきれでむせかえっている。俊彦が入っていくと、それらの視線が、まるで異質の人間が入ってきたことを敏感に嗅ぎ付けたかのごとくに、いつせいに俊彦を見下ろした。

俊彦は、この視線が嫌いだった。いまではいくらか慣れたというもの、最初係員として教授会の席に列席したときに感じたあの「階級的な疎外感」を、このような場に入る度に、全身に痛いほどに感じるのだった。

実際、学内には教員と事務員との格差が歴然とあって、助教授以上の教員にはそれぞれ個室があてがわれるのに、事務員は、広くもない部屋に二十人も、三十人もが一緒に詰め込まれている。一人当たりの給与も違えば、出張などで自由になる経費も問題にならないくらい違う。

それより、まず身分が違う。二十代の教員でも、先生は先生である。事務員がいくら事務局長や部長、課長などという肩書きを得たとしても、先生にはたちうちできない。

会議の席でも、事務員が自分から発言することは殆ど許されなければ、求められて答弁する場合でも、教員たちの気に入らなければ、

たちどころに発言停止となってしまう。

ときには、顎の先で出ていけというサインを出され、事務長以下一言の弁明もならず、眉をしかめて教授会の席から退場する。そして、気紛れな教員たちの発作的な作業が終わるまで、気長に別室で待機していなければならぬ。

こんなことをわかってかわからないでか、佐川たち総務課員たちは、教員にはまことに愛想がよい。直立不動の姿勢で、バネじかけの人形よろしく慇懃に応対する。そのくせ、すぐその後で、係員たちからねちねち繰り言をいう。同病相憐れむなどは全くほど遠い、複雑極まるひねくれた機構になっている。

さきの紛争では、まさにこういういびつな機構を打破するために闘ってきたのだった。が、一向にこの因習が改まらないばかりか、いったん白日の下に晒されたばかりに、よけいに理論武装がなされ、より陰湿で緻密な秩序が大手を振って歩き始めたのではないかとさえ思われる。

「総務課からまいりました」

俊彦が、見覚えのある教授の顔を演壇の下に見出してそういうと、「あ、そう」とにべもない。そうして、傍の太った赤ら顔の記者となにごとかを話し始めた。

「おそれいりますが」

教授は、資料の図解のか所を指しながら、機械の装置の説明に懸命で、俊彦のことばには耳を貸そうともしない。

「先生、千人をゆうに上回りました。まだ、二、三十人いますが、五分前には受付を締め切る予定です」

河田が、教授に歩み寄った。

「千人を超えたか」

教授はニヤリと笑い、満足気に頷いた。

「準備完了です」

「予定どおりにやってくれ」

河田は、教授のことばを聞くと、傍にいる俊彦には目もくれず、顎を突き出し、胸を張って、大股で教室を出ていった。

「わが国の明日のエネルギーの行方を担うべく使命をもって、最先端の領域を切り拓き、かつ極めんとするものであります」

河田の張りのある開会告示に続いて、主催者代表である教授が演壇に立った。フラッシュが焚かれ、カメラやテレビカメラの列が待ち構えるなかで、教授は、こぼれそうな笑みを満面に浮かべ、広い会場をひとわたり見回すと、そう口火をきった。

「天然資源の逼塞という状況の中にあって、われわれが果たすべき課題は、火急かつ甚大な意味をもつものであります」

教授のいく分上気した声が、静かにはりつめた会場を流れていく。その自分の声に勢いづいたのか、両手のこぶしを握りしめ、暑さのなかでキチンと着込んだ背広の胸の造花を震わせながら、一段と声を高めた。

「今回の報告は、斯界の研究史上に特筆すべきことであり、主催者側といたしましては、この上ない喜びであります」

俊彦も、報道陣の中に割り込んで、教授の正面から、右から、左から、さらに会場の風景も入れ斜め後ろから、と次々にフラッシュを焚いた。その度に、演壇の右下に設けられた主催者側席の河田の表情も、フィルムに確実に刻みつけられていく。

フアインダーの中の河田の表情は、たまたま主催者の役目がめぐってきた大学の一助教授というより、この学界の中核を支える若手研究者としての自負を明らかに見せ、フラッシュを浴びる度に、急激にその存在感を増していくかに見える。教授のことばに合わせて、口元に自信に満ちた笑いを浮かべるときの河田は、俊彦の手の及びようのない、なにか異次の世界へ移行していくのではないかという隔たりをさえ覚えさせるのだった。

突然、割れんばかりの拍手が会場を揺るがし、その中を壇上から、教授が天を仰いだ格好で下りてきた。頬や首筋に流れる汗を拭おうともせず、ゆつくりと下りてくる。

河田は、いち早く自分の席を立ち、教授の席の斜め後ろに構えると、長身の腰を折って、教授が戻ってくるのを待っている。

ミュージックが、バラード風の曲から、女性シンガーのデュエットに変わった。

和子が曲に合わせ鼻歌を歌っている。むげんだいは、五人の学生風の客が出ていったあとは、俊彦のほかに、一組のアベックが声をひそめて座っているだけで変化はない。

「遅いわねえ、マスター」

和子が指を鳴らしながらいった。

「この頃、ずっと洋子さんと一緒なんだから」

「じゃ、和ちゃんが、むげんだいの切り盛りをやってるわけだ」

「そう」

和子は、口を尖らせクスンと笑った。

「あの二人、どうなってるんだろう。マスター、今日も一時間とお店にいなかったのよ。怪しいんだなあ、あの態度」

「明石がねえ」

「と、思わない。へんにでれでれしちゃってさ。洋子、洋子、だもんね」

俊彦は、あの文系キャンパスで別れて以来、洋子からなんの連絡

もないのを怪訝に思っていた。

井熊の話を聞くまでは、洋子は決して不機嫌ではなかった。それが、いまは思い詰めた様子で、毎日明石と出歩いているという。

俊彦は、あの話の中に洋子の心を閉ざさせるなにかがあったとしても、俊彦自身にかかわることだとは思っていないが、あれつきりなんの連絡もないことが、俊彦の心を沈ませていた。

「二人で、なにか調べものでも始めたの」

「聞かないわ。とにかく、マスターの車であちこち遠出をしてるみたいで、帰ってくるよ、毎晩スナックのはしごをするのよ」

「和ちゃんは一緒じゃないの」

「マスター、とても嬉しそうにはしゃいじゃってさ。わたしの出る幕じゃないでしょ」

「わからないな」

「男と女のこと、理屈じゃないわ」

和子が、大人びた口をきく。

「それにしても、ねえ」

俊彦は、わりきれない気持だった。上村たちを含めたこのむげんだいの席で、洋子は、自分につき合ってほしい、といったのではなかったか。

「わからないものよ。どうしてあんな女にと思うやつに、わたしの趣味の男がくっついたりしてさ」

「和ちゃんらしくないな」

「その顔で、つていたいんでしょ」

「そんなこと、いつてないよ」

「顔にちゃんと書いてある」

本当に怒ったのかと思った和子は、しばらくすると、声をあげて笑いだした。鼻の頭に皺を寄せ、白い歯を光らせながら笑う。

「素敵だよ」

「調子が悪くなったもんだから、お世辞なの」

お世辞ではない。整った顔立ちに健康そうな肌。眺めると、いつも胸がすくのである。それなのに、それほど第一印象をとらえる派手さがないのは、質朴な山国育ちのせいであろうか。傍にいても異性を感じさせない。知らぬ間に横に立っていても驚いて腰を浮かしかけるというこない、どこの風景にでも、そのままそっくりはめ込んでしまえそうな存在だと思っっている。

その点、洋子とは全然違う。

「こんなことだと、この店すぐに潰れちゃうかもよ」

和子は、おしぼり用のタオルを洗って器用に丸めると、冷蔵庫の中に並べていく。

「奥さんは、なにもいわないのかな」

「マスターには虫がつきっこないって、頭から信じてるのね。いいえ、それほどの男でもないって、信用してないのかな」
和子は、冷蔵庫から氷のかけらをとり出すと、俊彦のコップにひとつまみ放り込んだ。

「やっぱり、噂の俊彦君がきてる」

明石が戻ってきた。小さな土産の包みをかかえている。遅れて、洋子も入ってきた。

「松井さん」

洋子の顔が、いきなり上気した。

「遅い、遅い。マスターたち、今日はどこをほつつき歩いてきたの」
「子供が生意気いうんじゃないよ。大人には大人の都合つてもものがあるのさ」

明石が、小指の先にぶら下げた土産の包みを、和子にさし出した。
「これでも、ちゃんと大人なんですから、お忘れなく」

「うん、これはまた、なんて立派な大人だ。ついこの間じゃないか、オネショが止まないっておふくろさんが嘆いてたのは」

「まあ、失礼しちゃう。もう、お店のこと、知りませんからね」
「そんなにむきになるのが子供の証だ」

明石は、いつになく機嫌がいい。愛用のパイプをとり出すと、立っている洋子を促して、カウンターの椅子に腰を下ろした。

「和ちゃん、済まないけどコーヒーを一杯くれないか」

明石は、頭を斜めに傾けて、マツチの火をパイプに移している。

「ちようどよいところだった。松井、今夜はとにかく洋子をお前に預けるよ」

「預ける」

「理由は本人に聞いてみることだ」

俊彦は、明石の横の洋子を見やった。洋子は、和子がさし出したコップの水を両手でささえ、音もたてずに一口飲んだ。

「マスター、えらく気取ってるけど、本当のところ、洋子さんにふられたんでしょ」

「こいつ、まだ俺をからかう」

明石のこぶしを振り上げるしぐさに、和子が舌を出して逃げた。洋子を預ける。

俊彦には、明石のいうことの意味がわからない。なんのために、自分に。

「いったい、明石」

「和ちゃん、コーヒーはキャンセル。ビールをくれ。この唐変木に少し飲ましてやれ」

「今日は駄目だ。これから句会だから」

「句会、こんなときに、アホくさいことぬかすな。句会なんぞ、いつだっていけるじゃないか」

俊彦は、井熊の茫洋とした顔を思い浮かべた。そして、Fビルの五階に集まる七、八人の老人たちを思った。

生き様というものを深く考える場所としては、この上もない場である。日常の、まるでたわいもない出来事が、いったんこの老人たちの手にかかる、あらゆる時空を包み込んでしまうほどの重さと、一刷毛の雲の軽さにも似たなにげなさとを併せもって、俊彦の前に現われる。俊彦は、その表現の巧みさに、何度胸を突かれる思いをしたか知れない。

しかし、いま、洋子と句会とを天秤にかけた場合、明らかに洋子の方に心が傾いている。

「その句会に、わたしも一緒できないかしら」

「句会に、それはちよつと無理だ。でも、今日はひよつとしたら出られないかもしれない、といってはいるけど」

嘘ではなかった。前回のとき、井熊には、学内の行事が入りそうなので、遅れるか、もしかしたら出席できないかもしれないいつてあった。その行事が、学長の都合で一週間延びたため、今日は昼から休暇をとって、むげんだいを覗いてみたのだった。

二軒目のスナックを出た頃から、ポツリポツリ降り出して、いまはかなりの本降りになっている。

俊彦は、窓ガラスを打つ雨の音を聞きながら、その窓ガラスにもたれている洋子の、疲れの浮いて蒼ざめた頬を見やった。

電車は、隣の県庁所在地であるK市を過ぎたばかりだ。時計は、午前一時をはるかにまわった。M病裁判闘争でかつて幾度も訪れたM市まで、あと二時間というところか。

H駅午後十一時五十九分発の特急に乗ったのは、以前、大学から市内のメインストリートをデモして、解散後に屋台で飲み、その足で最終電車に乗ったことがあるからだ。今度もその最終電車を選んだ。洋子のために、二十年前のコースをもう一度たどってみようというのである。

あれからむげんだいを出て、近くのスナックに入った。お互い黙ったまま、水割りを飲んだ。

一軒目のスナックを出るとき、洋子は、俊彦の肩にそつと寄り添ってきた。なにか、妙に軽い羽毛にも似たたよりなさだった。二人は、なにもいわずにそのまま歩いて、地下にある二軒目のスナックに入った。

カウンターの隅に並んで座った洋子の目に、俊彦は、うつすら光るものを見た。その洋子の指に静かに指を重ねると、洋子は、全身

の重みを俊彦の胸に預けてきた。

「眠った」

俊彦は、窓ガラスにもたれたままの洋子にいった。電車の座席に腰を下ろしてから、洋子はことばを発することをやめてしまった。俊彦は、隣の席にあつて、シートに浅く腰を落としている。

電車の震動で、ときおりズボンの生地を通して洋子の体温が伝わってくる。それが、冷やりとするほど冷たい。

「眠れないの。どこかに、ずんずん落ち込んでいくみたいで」

洋子は、窓ガラスに頬をもたせたまま、振り向かずに行った。俊彦には、二軒のスナックで飲んだアルコールの酔いが、まだ残っている。

「足元をささえるものがなんにもなくて、どこまでも落ち込んでいくの」

「疲れてるんだ」

「そうかもしれない」

洋子の声は、窓を打つ雨の音にかき消される。その窓の外を、街の淡い光が引き摺られながら流れていく。

車内には、二人の初老の客がいるだけである。彼らは、俊彦たちとは離れた最前部の座席に体を埋め、目を閉じている。

ふと俊彦は、洋子の体が小さく震えているのを感じて、思わずその肩を抱きとめようとした。が、洋子は、俊彦の手をそっと払った。

「わたしね、わたし、人を殺したのよ」

俊彦は、耳を疑った。

「二人も、よ」

「二人って」

「あのひと、わたしたちの子供と」

洋子の声は、涙声である。

「岡藤は自殺した」

「いいえ、わたしが殺したの」

「岡藤は、Tホテルで、あの朝」

「そう、あれは間違いなく自殺よ。でも、あの人を殺したのはわたしだわ」

「君が、どうして」

「あの人の生きる力を奪ったのは、わたしだわ。わたしがいなければ、あの人は死ぬことはなかった」

洋子は、背を向けたまま、声を殺してしゃくりあげ始めた。

「あのひと、わたしにいったのよ。産むなって。わたし、卑怯だって怒鳴ったの。あなたに、なんの殺す権利があるのかって。あなたは矛盾してるって。基地撤去闘争がなによ。M病公害闘争がなによ。」

あなたのいってることは嘘っぱちじゃない。とんでもないペテン師よ。自分の子を殺そうとして、なにを裁こうってのって」

「そんなことぐらいで岡藤が」

「あの人の家、お金もちでしょ。だから、お金もちって、やっぱり信用できないのねって。わたしが足手まといになるのね。きつとそうよ、あなたも作家のMと一緒に。傲慢で、一人よがり、潔癖屋で、あなたもMも、なにをいってるのかちつともわからないって。そうだったの。それが、あの人にどれだけ堪えたのか」

「岡藤は永くない命だった」

「だから、あの人は生きたかった。誰よりも、人一倍生きたかった筈よ。あんなに、生きること激しい気持ちをもっていた人が」

「二人とも、どうしてそんなに子供のことにこだわったの」

俊彦は、素晴らしいながら、これほど洋子を刺すことばはないのではないか、と思った。

「あの人が、あの人が、遠くない日にいなくなるとわかっていたからよ」

洋子は、岡藤が、自分の命がいくらもないことから、俺みたいなやつは俺一人だけでたくさんだ、といって譲らなかったのだと、唇を噛みしめながら、悔しそうにいった。

洋子は、泣くだけ泣くと、ゆっくり俊彦の方を向いた。

「あなたがいったことば、覚えてる」

「僕が」

「あの最初の晩、わたしの手を握って」

俊彦には、あの晩の記憶が欠落している。その糸口さえつかめないでいる。

「あなただけだった。君は、死ぬためにきたんじゃないかって。でもわたし、あなたに怒鳴り返した。バカにしないで。みそこなわないでって」

「そうだったな」

「嬉しかった。わたしの気持、あなただけがわかってくれたんだって。もしあなたがいなかったら、わたし、二人が眠っているこの街で」

「この街で」

「今日も、昨日も、その前の日も、三人の思い出の場所を葬ってきたの。もう、再び訪れることはないつもりで」

「まさか」

「いいえ、東京に帰るわ。あの人のために、生きられるだけ生きてみる。二度と、もう変な気持は起こさない。わたし、あの人の声をはつきりと聞いたの。あの文系キャンパスの噴水のところで。井熊さんのことば、あれは間違いなくあの人の声だった。あの人の声は、

わたしを責めるものだった。あの人の声が、わたしを奮立たせた」
俊彦の胸に、俯いたまま死んでいた岡藤の姿が、ありありと蘇ってきた。

岡藤は清冽な秋の朝の日差しが斬り込んでくる部屋で、鮮やかな血の色をまとったまま息絶えていた。その姿が、激しく炎え上がる強い意志の色を、そのまま氷の中に、ふいに封じ込めてしまったとでもいうべき冷たい熾烈な激情の色のままに、立ち上がってきた。
「わたし、自分ではもつと強い人間だと思っていた。十分自由に生きてると思っていた」

「仕事があまくいかなかったとか」

「その逆よ。テレビの短時間ものにもときどき声がかかるようになったし、連続ものにも手をつけるようになった。恐いくらい、同期生の誰よりも順調にいったわ」

「恐いくらい、なにもかも」

「そう、なにもかも忘れようと必死だった。誰にも負けないよう、強くなるうとした。自分でも小憎らしく思えるほど、強情だった。

その、前の方ばかりしか向いてなかった目が、ふと後ろを見たの。そうしたら、後ろがない。誰もいない。わたしの後ろが、かき消されたみたいにあつり途絶えてるの。暗がりなの。真逆さまに引き摺り込まれてしまっそうな」

洋子が、突然俊彦の胸の中に転がり込んできた。その冷たい洋子の肩が、俊彦の胸を痛いほどに押し上げてくる。

俊彦は、開かれた地の割れ目に舞い落ちかけた蜉蝣が、懸命に羽を震わせ、空中を目指し、幾度も浮揚しようともがいているのかもしれないと思った。

掛時計を見やった。五時の退庁時間まで、あといくらかもない。

昼過ぎに予期しなかった調査の依頼を受け、殆ど時間の経つのもわからないほど、これに没頭している。それも、明日が締め切りという。いまの大学に、こんな急を要する仕事があるとも思えないのだが、ときどき同様の依頼が舞い込んでくる。

俊彦は、資料の綴りをひっぱり出し、ぶ厚い調査表に大学の沿革、過去五年間の学生数の推移、留学生の国別受け入れ数などという項目を、一つずつ埋めていく。この分でいけば、四、五時間の残業は覚悟しなければならぬ。

「進み具合はどうだ」

佐川が、しきりに時間を気にしている。俊彦が、調査表の合間をみて、「近世貨幣の展観」と題した展示物の写真を図書館に撮りにいった間に、課長たちと麻雀の約束をしまったらしい。

つい先ほどまで、今日は借りを返させていただきます、などとひ

としきり麻雀談義をやつて、先発隊で五時に出ることにしましょう、
といつて切り上げたのだった。

「残業をするときは、係全員でやろうじゃないか」

俊彦の仕事がいつまでも止みそうにないのを、佐川はいまいまし
そうに睨みながらいった。こんなとき、自分に対する当てつけみた
いにしやがって、と佐川の胸の内が煮えくり返っているのが、俊彦
にはわかる。

しかし、調査表は明日までに仕上げなければならぬ。途中で切
り上げて明日にまわしてしまつたら、明日は明日でどんな仕事かと
び込みで入るかかわからないし、期限にはただでさえうるさい佐川の
ことだから、どんな嫌味を並べたてるかわかつたものではない。

残業は係全員で、というのは佐川一流のやり方で、自分のいない
ときに係員だけが残るといふのは、補佐や課長たちに対する心証が
悪いという理由による。また、その裏もいえることで、いつもたい
した用事もないのに残っている佐川であるが、その自分に係員も従
え、ということになる。

「松井君」

佐川は、奥の席から様子を窺っている課長の視線に、とうとうし
びれを切らしたとみえて、俊彦の後ろにまわり込んできた。

「協調ということが一番だ。君がいくら一人で頑張つたつて、評価
は上がらないんだよ。目の前のものを、がむしやりに片付ければい
いというものではない。仕事というものは、よく考えてやるものだ」
矛盾している、と俊彦はムツとした。いつかは、「理屈なんか二
の次だ。まず、目の前の単純なやつを先に片付ける。あとは、自分
のアイデアで仕事をつくり出す。要は、なにをつくり出すことができる
かだ。そして、そいつをどうやって人に納得させるか。ここだ
よポイント。なにしろ、人並みのことをしてたんじゃ、浮かびよ
うがないからな。競争だよ、この世界は」と、長々と訓戒を垂れて
くれたばかりである。

「その、目の前のものを片付けてるんです」

そういおうとして、俊彦はやめた。どれが目の前の単純作業で、
どれが自分のアイデア作品なのかなどと、いちいち気にしていたん
では、係は動いていかない。第一、佐川ほどの暇はもて余していな
い、と俊彦は考える。

考えろ、と佐川はことあるごとという。それならと、俊彦の考え
をいうと、君のは駄目だ、どうしてそう要領の悪い方ばかりにい
くんだ、と佐川はたちどころに不快な顔をする。

「論理だよ、論理。論理さえ間違わねば、なんとかなる。規程に定
められた以外の責任は負わない。これが、われわれの持つべき理念
だ」

佐川の結論は、いつもこういう具合に落ち着き、決まって、君は紛争の生き残りだからねえ、とつけ加える。

「佐川君、無理なんじゃないか、今日は」
首筋を叩きながら、課長がやってきた。

「いえ、大丈夫です。たいしたことじゃありません。たいしたことのない調査ですから、もういつでも提出できます」
佐川が、むきになって弁解した。

「もう帰るの」

ママが、怪訝そうにいった。

「少し疲れてるんです」

俊彦は、最後の一杯を盃に注ぎながら、腰を浮かしかけた。

「残業だったんでしょ。こんなときは、体を温めて早く寝むことよ」

「そうじゃないんです」

俊彦は、洋子のことを考えている。洋子が帰って、一か月余りが過ぎていく。それ以来、なんの連絡もない。

洋子は、M市を訪ねた次の日の朝、早い新幹線でひっそりと帰ってしまった。明石も、まだ眠っていた時間だったという。明石の妻が驚いてひき止めると、小さく微笑んで朝靄の中に出ていったと聞いている。

俊彦の胸には、あの冷いやりする洋子の、肩のあたりの感触が、まだ鮮明に残っている。蜉蝣色の羽を震わせながら、これ以上震えると壊れてしまうのではないかと思われるほど、動悸を激しく打たせていた。

俊彦は、洋子の肩を抱いたまま、未明のM駅に降りた。微かに見覚えのある駅前の風景の中に立ちながら、俊彦はそれ以上歩を進めることができなかった。

洋子も、俊彦の胸の中で、もう一言もことを発しなかった。

二人とも、町中に踏み込むことが、どういふことを意味するのか、わかっていた。

岡藤、河田、上村らとともに、いや、M病の被害者たちとともに歩いた町。春の日や炎天の下。車椅子に乗り、あるいは他の者の背に負われたM病の患者たちは、われわれの激しいシユプレヒコールの中にあつて、信じられないほど明るいのだった。

「いい人でもできたの」

「え、なにか」

「当たったでしょ。だって、話しかけても返事もしないのよ」

「話しかけた、ママさんが」

俊彦は、驚いてママの顔を見上げた。

「そうよ、ぼんやり考え込んでる」

俊彦は、自分でもはつきりしなかったぼんやりした思考の核心を、ママがいい当ててくれたのではないかと、弾かれる思いだった。

俊彦は、二階への階段を駆け上がった。俊彦の部屋は、一番奥の西の端にある。

一階からは、賑やかなステレオの音が響いてくる。いつもこのアパートの住人や、どうかすると南向こうの住宅からも文句をいわれている、二人連れの学生の部屋から響いてくるらしい。夜の十一時などといっても、彼らにとっては、ほんの宵の口でしかないのである。

勢いよく、風呂の湯を流す音もする。出るぞお、という男の太い声に混じって、甲高い子供のはしゃぐ声が聞こえる。

俊彦は、アルミのドアを引いて部屋にすべり込むと、壁のスイッチを押した。耳の奥にはママのことばの余韻が残っていて、ひとりで心が浮きたってくる。背伸びをし、口笛を吹きながら、俊彦は状受けから夕刊を抜きとった。

そのとき、スツと足元に落ちたものがある。薄い、白い封筒だった。中村洋子、とある。

俊彦は、夕刊を傍の机の上に放り上げると、急いで封を切った。〈黙ったままで帰京したこと、申し訳なく思っています。あなたに声をかけると、いつまでも去り難い気がしてならなかったからなのです。〉

自分のアパートに帰ると、次から次に仕事の話が舞い込んできて、最初はなにをどう始めてよいか、悲しいくらい迷ってしまいました。だって、わたし自身の気持の整理もつかないところに、お構いなしなんですもの。

でもわたしは、やらなければならぬと思っています。

あの文系キャンパスで聞いたあの人の声に、叱られるのです。俺のために生きてくれ、とあの人の声はいつているのです。君が死ぬときは俺が本当に死ぬときだって、そういうのです。

わたし、決して貞淑な女ではありません。だけど、あの人のことだけは、わたしの心から一生消え去ることはないと思っています。わたしがつまずいたり、泣いたり、わめいたりしても、あの人はきつと許してくれる、と信じています。なぜなら、あの人は、あの人のすべてをわたしに残したまま、あの人のすべてをわたしに賭けたからこそ、逝ってしまったのですから。

あなたの親切、感謝しております。もし、あなたがいなかったら、わたし、ためらわずに自分を捨てていたでしょう。本当に、あんなエアポケットのなかで、よくわたしを救い出してくださった。いえ、あの人を救い出してくださった、とそう感謝しております。

わたしは、わがままな女です。自分で自分が情けないほどです。でも、これだけは信じてもらいたいのです。わたしは、決してあなたに嘘をついたのではありません。どうか。やっぱり、わたしのわがままでしょうか。

明石さんや上村さんにも、迷惑をかけました。申し訳のことばもありません。

河田さんには、わたしという女の浅はかな胸の内が見えていたのでしょうか。むげんだいでのあのとき、二十年前に二人の関係を詰らされたときと同じに、足が竦む思いがしました。社革のことを一番真剣に思っていたのは、やっぱり河田さんです。わたしたちが葬り去った筈の社革が、河田さんの胸の内にも確かに生き続けているのを知ったとき、わたしはことばを失ってしまいました。

最後に、もう一つだけ、信じてもらいたいことがあります。この社革のことを、わたしは作品や記事の材料にしたりすることは決してありません。そんな資格もないと思っています。

俊彦は、読み終えると、その手紙をビリビリと裂いて、夕刊の上にこぼした。そして、畳にひっくり返ると、静かに目を閉じた。

(了)